

トビイロウンカに対するトリフルメゾピリム
含有水稻育苗箱施用剤の効果に影響を及ぼす
要因の検討

佐賀県農業技術防除センター 成 富 毅 誌

はじめに

イネウンカ類の中でも、トビイロウンカ *Nilaparvata lugens* は九州地域におけるイネの最重要害虫である。本種はウンカ類の中でも特に増殖力が高く、集中的な吸汁加害によって「坪枯れ」と呼ばれる稲の枯死を引き起こし、多発した場合は圃場全体が枯死して収量皆無となる程の深刻な被害をもたらす（図-1）。本種は、毎年6~7月ごろにかけて梅雨前線が北上して東シナ海から日本にかかり、前線の南側に強い南西風（下層ジェット気流）が吹くと、中国の華南地域から移出して日本に飛来し、移植して間もない水田に定着する（松村，2018）。このことから、九州地域における6月移植の作型（通称「普通期水稻」）における本種の防除には、まず飛来虫に対

して水稻育苗箱施用剤（以下、「箱剤」）を処理した苗を本田に移植するとともに、それらの子世代（第1世代）に対して8月上中旬に本田散布を行う防除体系が有効である（図-2）。近年、本種に卓効を示す箱剤の有効成分としてトリフルメゾピリムが開発され（大上・阿部，2019）、佐賀県では関係機関の連携によって生産現場へ速やかに普及した。奇しくも、普及して間もない2019年（真田，2020）および2020年には、近年にないトビイロウンカの多発が続いたにもかかわらず、生産現場において甚大な被害を免れることができたのは、本剤の普及によるところが大きい。一方、そのような多発年においても、本剤を使用した圃場でのトビイロウンカ被害がわずかながら発生している（佐賀県農業技術防除センター，未発表）。このことは、生産現場において本剤の



図-1 トビイロウンカの吸汁によるイネの枯死で生じた坪枯れ（A）およびイネの株元に多発するトビイロウンカ成幼虫（B）

Investigation of Factors Influencing the Effect of Rice Seedling Nursery-box Application of Triflumezopyrim on Brown Planthopper.
By Takeshi NARIDOMI

（キーワード：育苗箱施用剤，トビイロウンカ，防除効果，トリフルメゾピリム）